

ゆたか倶楽部 よもやま話

vol. 20

前回(7月号)に続き「ふじ丸」についてお話をします。

1989年(平成元年)4月のデビューから約四半世紀、25年間、地球を20周、1200航海、50万人の皆様にあ愛された名船「ふじ丸」が、2013年6月をもって引退しました。引退すると聞いたときはショックで、「スケジュールが埋まっていないところをすべて弊社でチャーターしたい」と申し出て、半年間で11回チャーターしました。ラストクルーズの皮切りは、1月4日発「伊勢神宮初詣と館山クルーズ」です。毎年恒例となっていた「ゆたか倶楽部主催ふじ丸ニューイヤークルーズ」の8回目である「種子島・徳之島・奄美大島・沖縄クルーズ」から、戻ってきたその日に出発しています。5月7日発「初夏の日本一周クルーズ」では、念願の石巻港へ寄港しました。なぜ念願かというと2011年のゴールデンウィークに「ふじ丸で航く弘前の桜まつりと函館・石巻クルーズ」を企画していたのですが、3月に東日本大震災があり、中止になったからです。ふじ丸は親会社の商船三井が行った被災

地救援活動に従事し、大船渡、釜石、宮古を訪れ4451人の被災者に食事や入浴のサービスを無料提供したことは、ニュースにもなりました。私は、ライフラインの復旧を待つて石巻市の担当者と連絡し、「近い将来、必ず寄港します」と交わした約束を、2年後になりましたが果たすことができませんでした。その他、人気の小笠原クルーズの全国展開を計画し、神戸発着、清水発着、名古屋発着、そして東京発着2回の合計5回実施しました。ラストクルーズは本来は船会社が主催するものですが、ふじ丸の運航会社である「日本チャータークルーズ」は主催旅行を企画するためのライセンスを持つていないため、弊社の主催で6月30日発「初島クルーズ」を実施しました。午後6時過ぎ、出港を知らせるドラと汽笛の音が流れる中、七色の紙テープと吹奏楽の演奏に送られて東京港晴海客船ターミナルを離岸。ラストクルーズを見送りに来てくれた多くの「ふじ丸」ファンが、ずっと手を振ってくれました。船内では、一般的なワンナイトクルーズよりも多くのイベントが行われ、音楽コ

ンサートやマジックショー、落語やカジノゲームと盛り沢山の内容でした。ふじ丸建造に携わった三菱重工の元船舶・海洋設計部長による講演会、初代船長をはじめ、チーフパーサー、総料理長、元商船三井客船常務取締役が登壇した座談会形式のトークショーなど、懐かしい面々にも集まっていたいただきました。チャリティーオークションでは、船内で使われた食器や海図、ヘルメット、帽子、バスローブなどの品々から、「ふじ丸」が寄港した港から寄せられた記念品やお土産までが出品され、総売上金は18万4600円になりました。弊社からの寄付金を足し、計20万円にして、石巻市に日本赤十字を通じて寄付いたしました。

7月1日午後7時半過ぎ、レインボープリッジをくぐり、晴海客船ターミナルに近づく、2隻の消防艇による最後の歓迎放水がスタート。船内と岸壁の双方から「思い出をありがとう」などの声が飛び交いました。すべてのお客様が下船し、母港の東京港晴海ふ頭からドックへ向かうふじ丸を、何人かの方々がペンライトでいつまでも見送り続けていたことが印



「ふじ丸」引退前のゆたか倶楽部スタッフ一同

象に残っています。2019年(平成31年)1月、5年間係留された広島県福山市の常石造船を離れ、中国へ回航されました。今だから言えることですが、実は「ゆたか倶楽部で買つてほしい」という話がありました。銀行に相談して融資の許可も出ていました。私自身は年10回ぐらいのクルーズを実施する自信はありましたが、クルーズ客船を所有して運航するには、弊社だけではどう考えても無理で、他の会社と組む必要がありました。しかし、結論を出すまでの時間が少なく、夢物語で終わりました。ふじ丸の建造があと2、3年遅ければ……。当時は国や都道府県、企業や学校の研修船としての需要が高く、1992ある客室の6割が4人部屋だったのもその名残りです。現在のクルーズはご夫婦かお一人様での参加が中心ですから、4人が入られる部屋に2人や1人で使用すると220、250名様で満室になり経営上その人数では採算が取れず赤字になってしまいます。お客様目線では、食事を1回制で食べられるので喜ばれますが、商売としては実に難しい船です。それでも私は大好きな船でした。

現社長にとっても「ふじ丸」は自身の結婚式を挙げた思い出の船であり、親子二代に渡りクルーズビジネスを継承するきっかけとなった船です。